

# ケア・フェミニズムの提唱

## コロナ禍とケア労働

昨年以来の新型コロナウイルス禍を通して、私たちの生活の根幹を支えているケア労働の重要性が、図らずも明らかにされることとなった。現場から離れることのできない対人ケア関係の医療機関・介護施設および保育・教育機関、そしてインフラを支える食料、電気、ガス、水道、通信、交通などの供給にかかわるエッセンシャルワークは、本来、リモートワークとは無縁であり、リスクを負いながらも、ワーカーの高い倫理性によって遂行されている。

さらに家庭内においては、休校中の児童や在宅勤務者（夫など）にかかわる、家事や健康管理といったケア労働（主として「主婦」が担う）の増大もみられた。家庭に丸投げすればなんとかなると言わんばかりに、家庭が、そして女性が“活用”された。

## ケア・フェミニズムの潮流

ところでコロナ禍以前より、2010年代以降のフェミニズム研究においては、ケアや依存に着目し、既存の社会のあり方を再検討しようとする「ケア・フェミニズム」の議論が活発になされている。言うまでもなく、そのルーツは、1980年代アメリカのキャロル・ギリガンによる「ケアの倫理」の提唱に遡る。その後、フェミニスト倫理学者のエヴァ・キテイが、『愛の労働』（1999 = 2010）において、ケアを「依存労働」と捉え、依存する存在として人間観に基づく社会制度のあり方について探求するなど、議論が続いている。

前回、確認したように、「主婦バックラッシュ」による男女共同参画批判の主張の内実は、主婦によってなされているケアの承認を求めるものであった。それは、現にケアを担っている者から自らの「依存労働」（キテイ）の意義を訴えるものではないかと、鈴木彩加は指摘している。したがって、「主婦バックラッシュ」は、性別役割分業を肯定する点で異なるとはいえ、「ケア・フェミニズム」との接点も多いと、鈴木は述べている。

## リーン・イン・フェミニズムへの対抗

一方、20世紀の終わり頃から、競争や効率を重んじる新自由主義が世界を覆い尽くすようになった。そうした体制の「内側に入る」「一員となる」（leaning-in）フェミニズム、すなわち「リーン・イン・フェミニズム」への対抗という文脈においても、「ケア・フェミニズム」が注目されている。

『99%のためのフェミニズム宣言』の著者たち（シンジアルツァ、ティティ・バタチャーリヤ、ナンシー・フレイザー）および菊地夏野の解説によれば、「リーン・イン・フェミニズム」の代表とされているのが、リベラル・フェミニズムである。「リーン・イン・フェミニズム」は、女性も競争に参入し、そこで高い生産性を挙げ、マーケットや国家に貢献することをフェミニズムの目的とする。新自由主義の掲げる「競争」や「効率」の言葉には人々は抵抗する一方、「多様性」という言葉で女性の成功や活躍が語られるとき、途端に新自由主義は輝きを増すというわけである。このようにして新自由主義が正当化され、フェミニズムはその侍女になり果てたと、N・フレイザーはいう。また、新自由主義の市場中心の平等観は、差別を糾弾し「多様性」

を掲げているとはいえ、その正体は能力主義（メリトクラシー）であるとされる。したがって能力のある女性は歓迎されるものの、99%の女性が直面している、社会経済的な差別の解消には取り組もうとしないのが、その特徴であるという。

日本の行政によるフェミニズムも、従来リベラル・フェミニズムであった。男女共同参画政策はもとより、近年の女性活躍政策の下にあっても、女性たちは従来の家事労働に加えて、「賃労働」（多くは非正規）、さらには「産む」（再生産労働）という二重の「生産性」を期待される存在となっている。実はそこには、経済成長、少子化対策、福祉削減の意図が秘められている。しかし、今日のポストフェミニズム状況下において、すでに若い女性たちは、キャリアと産むことについての自己マネジメントを行い、結果についての自己責任を内面化していると、元橋利恵は指摘している。

## 社会的再生産の視座

「99%のためのフェミニズムとは、「社会的再生産」（social reproduction）に根差したフェミニズムであるとされる。以下、菊地夏野の解説に依拠し、社会的再生産と資本主義とジェンダーの関係について辿ってみよう。

社会的再生産とは、「生命を産み、維持し、継続させる活動と制度」を意味しているという（T・バタチャーリヤ）。具体的には、出産、育児、家事、介護といった活動、そして住居、公共交通、病院、学校などの制度であり、主として担っているのは女性である。この社会的再生産から経済的再生産をくり抜き、分離し序列化することで資本主義が成立したと、フレイザーは述べる。資本主義は、社会的再生産を価値の低いものとして扱うが、このことが女性の抑圧の根本にあるとされる。逆に言えば、資本主義は、ジェンダー化された社会的再生産の抑圧なしには成立し得ないことになる。

こうしてみると、「99%のためのフェミニズム」は、ケア・フェミニズムと親和的であることが分かる。さらには、エコフェミニズムにおける、資本主義の論理に対抗するオルタナティブな社会の構成原理としての「サブシステム」概念（あらゆる人間の活動の根底にある営み）や、資本主義への批判的立ち位置などと考え合わせれば、それはエコフェミニズムとも近い距離にあるといえる。

翻って、宗教の方向性を考えるとき、「勝ち組」への仲間入りを目指す、体制的で現世利益的な、いわば「リーン・イン宗教」ではなく、ケアに重きを置く宗教が人々に選ばれることは、論を俟たないであろう。

## [参考文献]

- エヴァ・フェダー・キテイ 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社、2010年。  
鈴木彩加 『女性たちの保守運動』人文書院、2019年。  
シンジアルツァ、ティティ・バタチャーリヤ、ナンシー・フレイザー共著 『99%のためのフェミニズム宣言』（恵愛由訳、解説：菊地夏野）人文書院、2020年。  
元橋利恵 『母性の抑圧と抵抗』晃洋書房、2021年。